

多収で病気に強い水稻新品種「空育195号」

背景

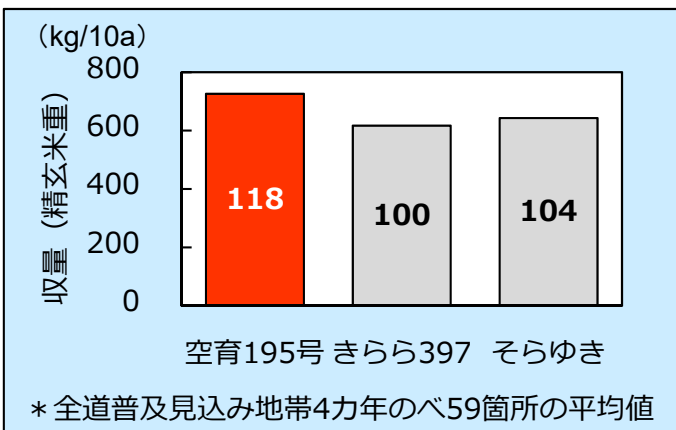
北海道米の生産において、中食・外食需要米の安定供給、生産者の収益確保、環境負荷軽減が求められている。



たわわに実った「空育195号」

成果

1 安定して優れた収量性



「きらら397」と比べて18%多収

2 いもち病*に強い

空育195号 穂いもち抵抗性“強”
きらら397 穂いもち抵抗性“中”



* 水稻栽培での最重要病害。発生すると葉や穂が枯れ、多発生の場合は減収要因となる

薬剤防除が不要：コスト削減、環境負荷軽減

3 中食・外食用に適する



上記用途における実需者からの食味・加工適性評価は「きらら397」並

期待される効果

新品種で「きらら397」「そらゆき」の全て（8,000 ha）を置換え、北海道米の生産振興に貢献する。

コンバインで収穫ロスが少ない！ 小豆「十育180号」

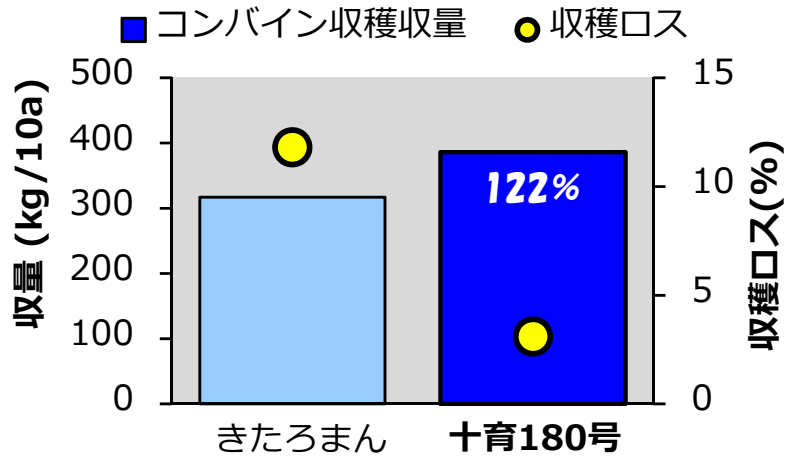


背景

- ・ 収穫作業時間の長い小豆では機械収穫向け品種が求められている。
- ・ 現行品種は地際の^{さや}莢が多く収穫ロスも多い。

成果

1 コンバイン収穫で多収



「きたろまん」より収穫ロスが少なく多収で、高い収益性が得られます。

2 地際の^{さや}莢が少ない草姿



地際の^{さや}莢はコンバインで収穫できず、ロスとなることから、草姿を改良。

3 北海道産品質



おいしい和菓子やあんができます！

期待される効果

大規模畑作地帯における小豆の省力安定生産に貢献でき、実需者と生産者の双方の利益性向上が期待される。

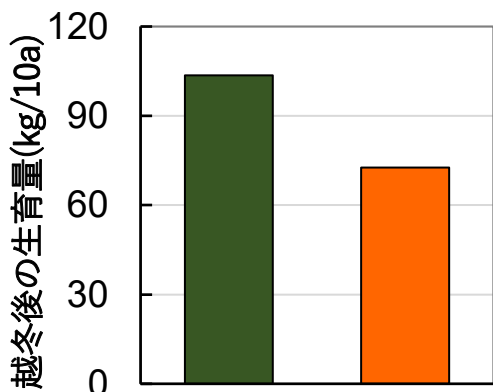
雑草を抑えて収量も安定 秋まき小麦有機栽培のコツ

背景

畑で冬を越す秋まき小麦有機栽培は生産拡大が期待されているが収量性が低いため、安定生産技術が求められている。

成果

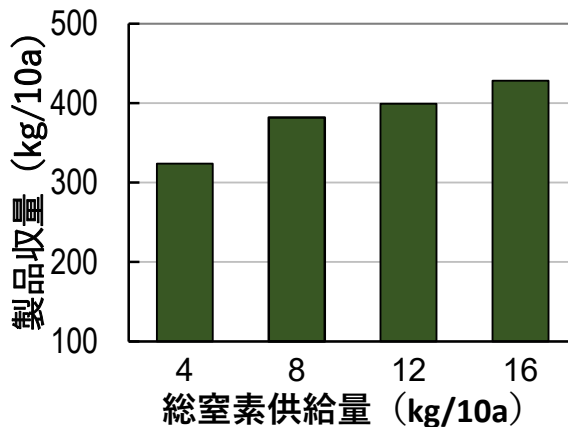
1 は種時期と越冬性



早期は種 標準は種

越冬後に生き残る小麦は早期は種で多い

2 窒素供給量と収量



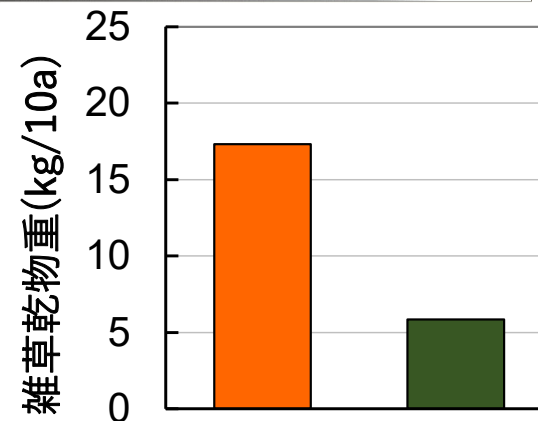
窒素供給回数・供給量※の増加で収量が最大3割増

※発酵鶏ふんを使用し、は種時に窒素4kg/10aの他に、3月中旬(雪上)に窒素4kg/10aおよび5月下旬(止葉期)に窒素4~8kg/10aを供給



収穫期の小麦と緑肥(シロクロバ)

3 間作緑肥の効果



緑肥なし 緑肥あり

シロクロバ同時は種で雑草量が1/2~1/3に

期待される効果

有機栽培小麦の需給改善・生産者の収益向上へ貢献
有機農業拡大に向けた取り組みへ寄与

移植たまねぎの窒素分施では、土壤窒素を確認しよう

背景

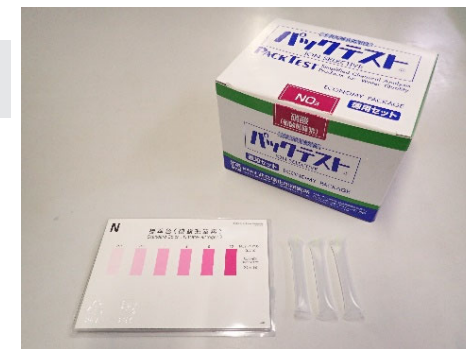
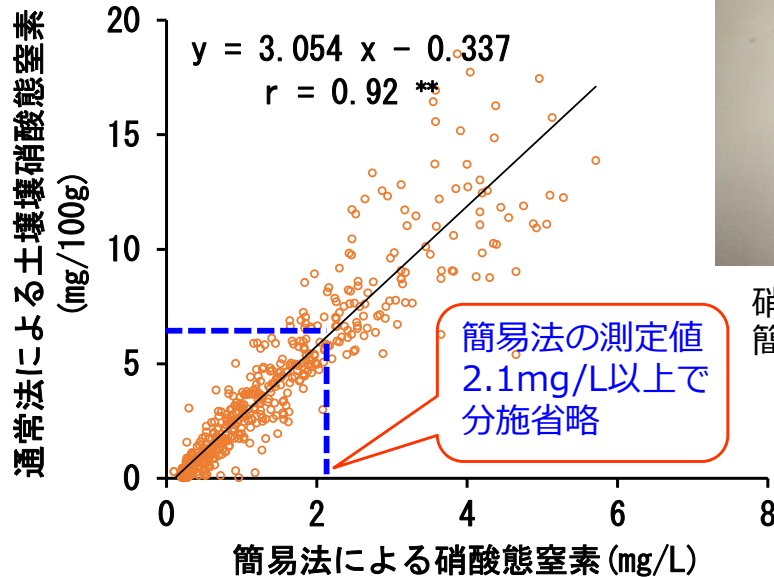
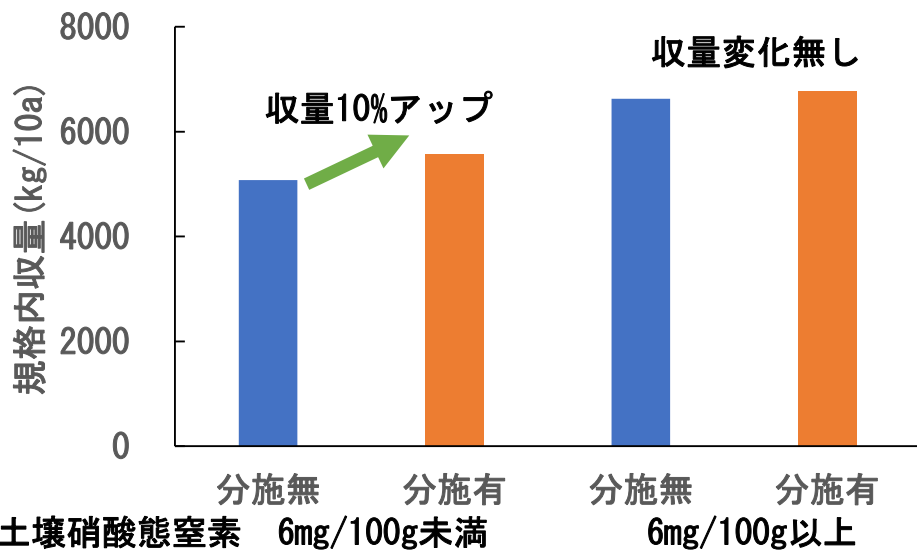
分施（ぶんし）：作物の養分吸収特性を考慮し、肥料の一部を計画的に分けて施用する方法。
たまねぎでは1回目（移植時）に2/3、2回目（移植4週後）に残り1/3の肥料を施用。

近年は分施でもたまねぎ畑の土壤窒素が過多の傾向にあり、環境負荷リスクが高まっている。

成果

1 土壤窒素6mg/100g以上で2回目の施用を省略

2 高精度・迅速な簡易測定法



↓ 数値化



硝酸態窒素測定に用いた簡易測定器の例 (デジタルパックテスト)

期待される効果

窒素過多が懸念される移植たまねぎ畑において、環境負荷等低減のための窒素施肥法として活用。

農林業センサスを用いた農家戸数の将来予測

背景

※
本道農業の発展と安定生産に向けて、将来の担い手予測を踏まえた農業施策や技術開発目標の設定が急務。

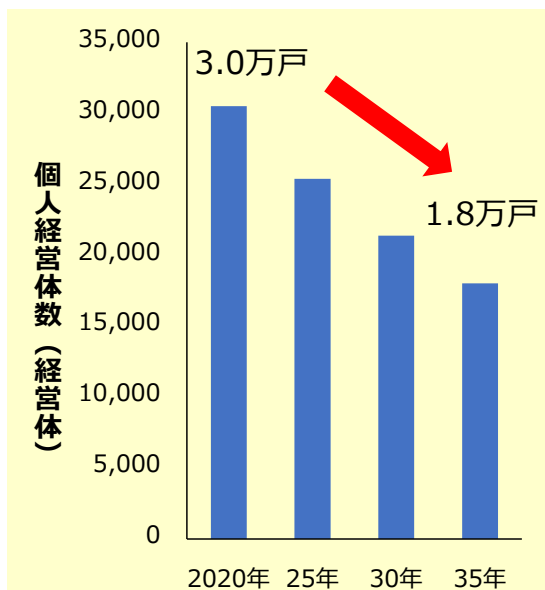


大規模水田作経営

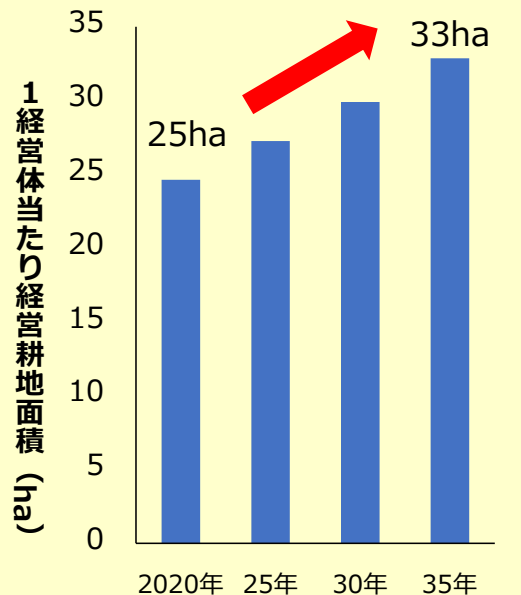
成果

※ 将来の農家人口の推計に基づいて、個人経営体数と1戸あたり面積を予測

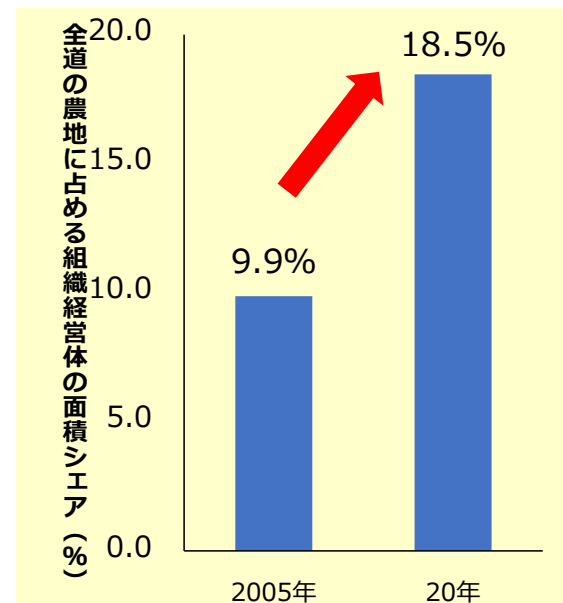
1 個人経営体は減少



2 1戸あたり面積は拡大



3 組織経営体の役割は拡大



期待される効果

注) 個人経営体には、1戸1法人を含まない。

注) 組織経営体 農業法人やTMRセンター等

全道の振興局および各市町村において、農業施策や技術開発目標を設定する際に活用される。